

1870 年代の新聞投書者の動向に関する一考察

石 堂 彰 彦

1. 問題の所在

近代初期の日本において陸続と発行された新聞は、1870 年代半ばの政論紙化、および庶民向けの『読売新聞』の創刊（1874<明治7>年 11 月）によって、大新聞と小新聞というふたつの系統にわかれていった。両者の相違は読者層や論説の有無に求められることが多い⁽¹⁾。

いわゆる政論紙化とは、1873（明治6）年後半の征韓論や外債問題、とりわけ 1874 年 1 月に『日新真事誌』が民撰議院設立建白書を掲載したことを契機に、まず投書に徐々に政治的言説がみられるようになり、ついで 1874 年後半から 1875（明治8）年にかけて新聞各紙が社説欄を設け、政治的言論を前面に掲げるようになっていった現象を指す。政論紙化以前⁽²⁾の新聞は文明開化を主潮としていたが、政論紙化によりその志向は薄れていったとするのが通説である。

そして同じ時期に、のちに小新聞と呼ばれるようになる『読売新聞』以下の各紙が創刊される。これにより、政論紙化した新聞は大新聞と称されるようになる一方で、小新聞は、政論紙化した大新聞⁽³⁾がそぎ落としていった文明開化の啓蒙を、紙面の中心にすえたのである。こうして政論紙化と小新聞の登場がほぼ同時期に重なることで、すくなくとも結果的には、政論紙化以前の新聞にみられた文明開化的側面が、小新聞によって受け継がれていったといえる。そして政論紙化以後の大新聞と小新聞の内容面における違いは、読者層においても、大新聞は政治意識の高い士族や豪農商といった平民上層、小新聞は市井の問題に関心のある商人をはじめとした平民中層という違いとなって現れていったとされる⁽⁴⁾。

政論紙化以後の大新聞と小新聞の以上のような相違や断絶は、これまでたびたび指摘されてきた。一方で政論紙化以前の大新聞と小新聞の関係については、ほとんど検討されることがなかった。しかし、政論紙化以前の大新聞と小新聞は、上述のように文明開化促進という内容面において共通している。そうであるならば、これらの新聞の読者層、あるいは投書者に、なんらかの連続性がある可能性も否定できないだろう。

政論紙化以前の新聞の読者層は明らかとなっていないが、政論紙化以前・以後を問わず投書はいずれの新聞にも多数掲載されていた。こうした投書者のなかに、政論紙化以前の大新聞と小新聞の

双方に投書が掲載された者がいれば、それはこれらの新聞の投書者に連続性があったことを意味する。また、政論紙化以後の大新聞と小新聞の投書者に同一人物がいるとすれば、そのことは読者層や内容面で大きな違いがあるとされる大新聞と小新聞に対して、たんなる読者としてではなく、投書を行なうほど強い関心をもって接していた者が存在したことを意味する。そしてこうした投書者がどの程度の規模で存在し、その投書がどのような内容であったかを明らかにすることで、小新聞と、政論紙化以前・以後の大新聞とのあいだの断絶や連続性について、投書者の側面から通説を検証するとともに、なんらかの新たな知見を得ることもできるはずである。

本稿は、以上のような問題関心にもとづいて、大新聞（政論紙化以前も含む）・小新聞双方に投書が掲載された投書者に関して、その経歴および投書内容・投書動向にかんする調査を行なった。

対象とした新聞は、1870年代に東京および横浜で発行された主要紙である。大新聞は、『東京日日新聞』、『郵便報知新聞』、『朝野新聞』、『東京曙新聞』、『横浜毎日新聞』、『日新真事誌』の6紙である。小新聞は、『読売新聞』、『東京絵入新聞』、『仮名読新聞』の3紙を対象とした⁽⁵⁾。調査対象とした期間は、大新聞が発行され投書欄が設けられた1872（明治5）年から1879（明治12）年までである。調査方法は、上記各紙の投書欄⁽⁶⁾に掲載された投書に付された署名および住所等をすべてリスト化して、それをもとに同一投書者を同定する作業を各種人名辞典などを用いて行ない、そのうえで大新聞と小新聞双方にまたがって投書した投書者を特定していった。

なお投書の扱いについてはひとつ大きな問題があった。初期の大新聞には投書欄がなく、通常の記事のように記載された文章の最後に単に署名のみが記されたり、あるいは「右投書」と付されていることが多い。その場合の扱いをどうするか、という問題である。また投書欄が設けられたあとにも、雑報中に署名付きの記事が掲載されることもあった。このため、投書欄が設けられる以前の上記のような文章を投書として採用すれば、投書欄創設以後の雑報中の署名記事も投書として扱うのかという問題が生じる。そこで本稿では各紙に投書欄が設けられて以降、その投書欄に掲載された投書のみを投書として扱った。投書欄が設けられた時期は各紙異なるが、それぞれ以下のとおりである。『東日』1873年3月、『報知』1873年6月、『朝野』（『公文通誌』）1873年3月、『横毎』1874年1月、『真事誌』1872年9月、『曙』（『新聞雑誌』）1874年8月。

以下の各章では、まず第2章で、政論紙化以前・以後の大新聞と小新聞双方に投書が掲載された者に関する全般的傾向を分析する。つづく第3章では、（政論紙化以後の）大新聞と小新聞双方に投書が掲載された者の投書内容について検討する。第4章では、（政論紙化以前の）大新聞から小新聞へと投書先が変化した投書者について、その量的および内容的側面について検討していくこととする。

2. 投書者の全般的傾向

本章では、政論紙化以前・以後の大新聞と小新聞双方へ投書が掲載された者（以下、「大小投書者」と記す）の総数、投書掲載数など、基本的な量的側面を分析していく。

大小投書者の総数は92名、投書掲載数は延べ1,137件である。これを同時期の大小9紙の全投書者数14,643名⁽⁷⁾、および全投書掲載数23,688件にくらべると、それぞれ0.6%、4.8%となる。投書者数にくらべ、投書掲載数の比率が若干高くなっているのは、投書掲載数が非常に多い大小投書者が含まれること、全投書者の1人当たり投書掲載数が2件未満であるのに対し、大小投書者の場合は、最低でも投書掲載数が2件はあることによる。いずれにせよ、大小投書者の数は、全投書者数にくらべ非常に少ない。このことは、大新聞と小新聞の読者層の相違が、投書者に関しても同様に指摘できることを示しているといえる。

つぎに、大小投書者の投書先の内訳についてみていく。表1に、大小投書者の投書先の内訳および簡単な経歴について示した。表からわかるように、いずれの新聞にも偏りなく投書している者はほとんどいない。仮名垣魯文と学農社は多くの新聞に投書が掲載されているが、仮名垣魯文の大新聞への投書のうち6件は、自著の剽窃問題への対応や言い訳である。また学農社は、津田仙が中心となって設立された勸農結社だが、当時媒助法という農業収穫高向上のための農法を試験しており、その宣伝や、その効力に疑義を呈する者(島村泰)とのあいだの論争の投書が多い。つまり、両者とも広報を目的として、複数の新聞へ投書を行なっているのである。それ以外の大半の投書者の投書掲載先は、大新聞か小新聞いずれかに偏る傾向がある。また大新聞と小新聞の内訳をみると、いずれか一紙に投書が集中していることもわかる。このことから、大新聞か小新聞にかかわらず、投書者は特定紙を中心に投書活動を行なっていたといえるだろう⁽⁸⁾。

また、投書掲載先の新聞ごとの大小投書者数の合計を、表1の下部に示している。まず大新聞についてみると、『東日』『報知』『朝野』の三紙が残りの三紙にくらべ多くなっている。『真事誌』は1875年12月で廃刊となっているので当然といえるが、残りの二紙は『横毎』が1879年まで横浜発行であったこと、『曙』は『東日』『報知』『朝野』三紙に比して新聞としての勢いがなかった⁽⁹⁾ことも関係していると思われる。また『横毎』『曙』は、前三紙よりも投書欄の設置時期が遅かったことも若干影響している。

小新聞では、『読売』が圧倒的に多く、すべての大小投書者のうち8割が『読売』に投書している。小新聞の残り二紙への投書者は『読売』の3分の1しかいない。これは『読売』が、『絵入』『仮名読』に先んじて創刊され、発行部数も二紙にくらべて多かった⁽¹⁰⁾ことも関係していると思われる。さらに表2には、大小投書者の投書掲載先新聞の組み合わせを示した。いずれの大新聞との組み合わせでも、『読売』に投書が掲載された者がもっとも多いことがわかる。これらのことは、『読売』投書者が、他の小新聞に比して幅広い階層から構成されていたことを示しているのではないだろうか。『読売』の読者層については、「東京の商人を中心にかなり幅広い読者」を有し、かつ「関東を中心に地方にかなり進出している点も、他紙には見られない特徴であった」⁽¹¹⁾と指摘されているが、投書者についても同様のことがいえると考えられる。

以上のように、大小投書者の数は、同時期の全投書者数に比してきわめて少数であった。また大小投書者のうち、大新聞と小新聞へ偏りなく投書している者はほとんどいなかった。これらのこと

から、投書者に関して、大新聞と小新聞のあいだには大きな隔たりがあったといえる。ただし『読売』の投書者には、他の小新聞に比べ大新聞投書者が多く含まれていた。大新聞投書者は小新聞投書者より全体として階層が上位と考えられるため、『読売』は他の小新聞よりも階層の高い投書者を多く獲得していたといえる。大小投書者に関する以上の点は、いずれも大小各紙の読者層に関してすでに指摘されていた点とほぼ一致しているといっていよう。

3. 大小新聞への投書内容の相違

本章では、政論紙化以後の大新聞と小新聞に投書が掲載された投書者の投書内容について検討する。ここでの主要な論点は、大小投書者が、大新聞と小新聞の性格の違いに応じて投書の内容を書き分けていたのか、という点にある。なお政論紙化以前の大新聞と小新聞に投書が掲載された投書者については、次章で検討する。以下では、まず投書掲載数が上位の投書者を中心に検討していく。

星野康斎は、1875年から1879年までの長期間にわたって大小両紙への投書が続いていた。星野という人物に関しては、「芸州の屋敷」に住む「福澤〔論吉——引用者注〕と「懇意な医者」であることが「現段階では間違いないところ」とされている⁽¹²⁾。星野の投書にも薬の分量に関するものなど、薬や病気関連のものがいくつかあり、すくなくとも医者であることは確実だろう。

星野の最初の投書は、1875年9月10日の『朝野』に掲載された、北京の友人からの書状を紹介したものである。同月に『読売』にも投書しており、これは祝祭日に国旗を掲げる家が少ないことをたしなめる内容である⁽¹³⁾。この月以降、『報知』や『東日』にも投書している。まず大新聞への投書から見よう。

星野の大新聞への投書は、政治関連⁽¹⁴⁾の内容のものが多。たとえば、1875年の江華島事件を受けて高まる征韓論を批判した投書は2件あり⁽¹⁵⁾、民撰議院にも関心があったらしく、関連の投書が4件ある⁽¹⁶⁾。また西南戦争のさなかに西郷隆盛を「賊」とした投書や、民権を論じた投書もそれぞれ1件ある⁽¹⁷⁾。直接に政治に関わるもの以外としては、平民の無気力を批判したもの⁽¹⁸⁾、隠居という呼称について論じたもの⁽¹⁹⁾などがある。

星野の小新聞への投書内容は、大新聞の投書のように政治に直接関連したものはほぼ皆無といっていよう。さきの薬に関する投書は小新聞に限定されている⁽²⁰⁾。また、寒参りに対する旧弊批判⁽²¹⁾や、子の教育について親を説諭する内容⁽²²⁾など、当時小新聞でたびたび議論的となったことがらや、1877(明治10)年のコレラ大流行の際のコレラ関連の投書⁽²³⁾など、いずれも生活や社会に関連した内容である。「民権」や「国益」に触れたものも1件あるが、これは平民の「卑屈根性」を批判して学問をすすめることが主眼の投書である⁽²⁴⁾。このように星野の投書内容は、大新聞と小新聞とで大きく異なっていた。星野は大小の新聞の性格や読者層を意識し、かなり明確に書き分けていたといっていよう。

こうした傾向は、他の多くの投書者にも現れている。

のちに衆議院議員となる角利助は、小新聞に対しては学問を勧める投書⁽²⁵⁾や禁酒にまつわる笑い話⁽²⁶⁾などを投書しているが、大新聞では、他紙の社説批判⁽²⁷⁾から圧政批判⁽²⁸⁾にはじまり、民権や府県会に関する議論⁽²⁹⁾など、政治的内容の投書がほぼすべてを占めている。

大小両紙への投書数が星野以上に多い澁花翁は、大新聞が政論紙化する以前から投書が続けており、その最初の投書では、民衆を治めるための方策を論じている⁽³⁰⁾。これ以降、明治初期に士族の特権のひとつとして政治上の大きな問題となっていた家禄奉還⁽³¹⁾や、樺太千島交換条約締結に関して他の投書者の樺太売却論を批判したもの⁽³²⁾などがあるが、大新聞の政論紙化以前・以後を問わず、政治に直接関連するものはそれほど多いわけではない。しかし学問を論じた「実学弁」⁽³³⁾や、ほぼ全文が漢文の投書⁽³⁴⁾、あるいは宗教の真偽に関する議論⁽³⁵⁾など、その内容が庶民にとっては難解と思われるものも少なくない。一方で小新聞への投書では、淫風を批判したもの⁽³⁶⁾や、学問を化け物にたとえて平易に説論するもの⁽³⁷⁾など、大新聞の投書にくらべて易しい内容が大半である。ただし「自主自由の権」に触れたもの⁽³⁸⁾もあり、星野や角ほど明確な違いはみられないが、やはり内容に応じて投書先の新聞を選択していたと考えられる。

大蔵省官吏である島村泰の大新聞への投書は、士族の家禄奉還についてが1件⁽³⁹⁾、やはり士族の処遇問題として議論されていた士族授産に関するもの3件⁽⁴⁰⁾、また自らが中心となって設立した結社に関する3件⁽⁴¹⁾などである。一方で小新聞には、女性や子どもの教育を強く意識した「女教朝鏡」という七五調の長文の投書を寄せ、これは4回にわけて掲載されている⁽⁴²⁾。

また、反政府の急先鋒に位置した『評論新聞』記者で、1875年末に筆禍で投獄された山脇巖の投書は、小新聞では剃髪に害のあること⁽⁴³⁾や、外国人の賭け事が人々に悪い影響を与えること⁽⁴⁴⁾など、穏健な社会的内容が主である。これに対し大新聞には家禄奉還⁽⁴⁵⁾から星野にもみられた征韓論批判⁽⁴⁶⁾、1875年に制定された新聞紙条例に関するもの⁽⁴⁷⁾など、士族の関心事や政治的内容の投書がほとんどとなっている。

投書掲載数の多い者の大半は、以上のように大新聞と小新聞の投書内容にかなり明確な違いがあるが、例外的な投書者も存在した。たとえば後に『神戸又新日報』社長となる渡辺晴雪には、政治絡みの投書がほとんどなく、郷里の岡山に帰郷した際の雑感⁽⁴⁸⁾や、小説の効能⁽⁴⁹⁾、社会の弊風⁽⁵⁰⁾を論じるなど、大新聞にほぼ一貫して社会的な内容の投書を行なっている。

渡辺のように、大新聞に社会的話題を一貫して投書する人物は極めてまれだったが、一方で、ここまでみたように小新聞に政治的内容の投書が掲載されることもほとんどなかった。もう一例挙げると、西村賢八郎は、戊辰戦争の際に函館に集まった「旧幕臣」と「会仙両藩」の「同志」が遺した数々の和歌を大新聞に投書している⁽⁵¹⁾。西村は、かつて彰義隊第十八番隊隊長であり⁽⁵²⁾、政治意識が非常に強い人物とも考えられるのだが、小新聞には、自身の住んでいる限界で見聞した「湯屋」⁽⁵³⁾や「若い衆」⁽⁵⁴⁾などの悪弊や旧弊に対する説論を数多く投書している。西村があまりにも近所の出来事を書き立てるため、周囲からかなり疎まれたらしく、自ら投書をやめる旨の投書を行なったほどだが⁽⁵⁵⁾、その後実名から筆名に変えて投書が続いている。

以上は投書掲載数の多い投書者の傾向だが、次に投書掲載数が少ないケースを検討する。大小両紙の投書掲載数が2件の者、つまり政論紙化以後の大新聞と小新聞それぞれに1件ずつ投書が掲載された者は20名いる。これら投書者の投書内容について、まとめて検討する。

まず同一投書者による2件の投書がほぼ同内容であるのは7例ある。このうち、中傷に対する反論⁽⁵⁶⁾と記事の正誤を求める投書⁽⁵⁷⁾を除くと、残りの投書は、裁判の数の多さを問題視した投書⁽⁵⁸⁾、目黒の元富士山の景観を称える投書⁽⁵⁹⁾、棕櫚栽培法⁽⁶⁰⁾、蚕紙商人に忠告した雑誌記事の要約⁽⁶¹⁾、自店で販売中の薬の使い方についての注意⁽⁶²⁾である。いずれも社会的ないしは身近な話題を取り上げたものである。

残り13名の投書は、大新聞には政治的ないしは士族関連、小新聞には文明開化や卑近な話題を取り上げるなど、大小両紙で書き分けていると思われるものが多い。たとえば大新聞には刀剣の処分法、小新聞には旧弊批判という組み合わせ⁽⁶³⁾、以下同様に、竹橋事件の兵士への説論と筆筆の流行について⁽⁶⁴⁾、国家の独立と地主差配人批判⁽⁶⁵⁾、陸軍の軍規の厳しさと学問推奨⁽⁶⁶⁾といったように、これらの投書は明らかに意識して書き分けられている。書き分けがあいまいなものもあるが⁽⁶⁷⁾、総じて大新聞は政治的、小新聞は社会的話題が中心となっており、小新聞に政治的話題を投書しているケースはほとんどみられなかった⁽⁶⁸⁾。

ここまで、政論紙化以後の大新聞と小新聞の双方に投書が掲載された者の投書内容について検討してきた。全体的な傾向として、大小両紙へ投書が掲載された者の投書内容は、大新聞では政治的、小新聞は社会や芸能関連の話題が主であった。すなわち政治的問題から生活にかかわる身近な話題まで、多様な関心や主張を抱えた投書者であっても、通説で示されてきたような大小新聞の内容や読者層の違いに応じて、投書内容の書き分けを行っていたといえるだろう⁽⁶⁹⁾。ただし、これら投書者自身の経歴や社会階層は、通説の読者層イメージには必ずしも収まりきらない存在でもあったが、その数はきわめて少数だったのである。

4. 大新聞から小新聞へ移行した投書者

本章では、大新聞が政論紙化していった時期に、投書先を大新聞から小新聞へと変えた投書者について検討する。前章でとりあげた投書者は、そのときどきの問題関心に応じてあるときは大新聞、あるときは小新聞に投書していた。しかし投書者のなかには、政論紙化がはじまり小新聞が登場した時期に、投書先を大新聞から小新聞へと変えていった者もいたのである。

1874年以前の大新聞、すなわち政論紙化以前の大新聞に投書し、その後投書先が小新聞のみとなっていった投書者は、大小投書者92名のうち、21名いる（表1の注1参照）。一方で1874年以前に大新聞に投書し、政論紙化以後も大新聞への投書を継続し、小新聞へも投書した者は6名である⁽⁷⁰⁾。つまり大小投書者のうち1874年以前に大新聞へ投書していた者は27名おり、そのうち21名がその後投書先を小新聞に変えているのである⁽⁷¹⁾。これらの投書者の各年ごとの投書先につい

て、表3に示した。以下ではまず、投書掲載数の総計が5件以上の投書者9名について、その投書内容を検討していく。

前島和橋は小新聞の常連投書者として知られるようになるが、1874年に大新聞へも投書していた。そのうち1件は、「新聞局の評」と題し、各新聞社を歌舞伎役者に見立てて評したものであり⁽⁷²⁾、もう1件は島津久光の筆になるとされる漢詩を紹介したものである⁽⁷³⁾。いずれも文芸、芸能が絡んだ投書であり、1890年代に九代目川柳を襲名する前島らしい投書である。その後小新聞への投書は『読売』からはじまり、『絵入』『仮名読』が創刊されるとほとんど間髪入れずに両紙への投書も開始している。小新聞への投書は、替え歌や狂句、狂歌、落とし話など、いずれも自身の興味に沿った内容となっている。なお『仮名読』についてみれば、投書の半数以上に詩歌形式を用いているとされる⁽⁷⁴⁾。前島の投書は、このように大小を問わず社会的というより文芸的だった。そのため小新聞の登場とともに、政論紙化しはじめた大新聞への投書をやめ、小新聞を投書先として選択していったと考えられる。

仮名垣魯文は、『安愚楽鍋』などの戯作者として、また『仮名読』編集長として知られるが、『仮名読』以前は『横毎』で記者をしていた。そのためか初期の投書にはかなり堅い内容のものが見られる。最初の投書では、新聞の記事内容に対する官員の圧力を批判し⁽⁷⁵⁾、つづく投書では、「上下会議」を興して官員を能力で選び、外国人に日本は「君主専制」ではないことを示せと主張している⁽⁷⁶⁾。しかし小新聞への投書を行ないはじめ『仮名読』を創刊する頃には、そうした硬派の投書は影を潜め、特有の戯作調の文体で世情を面白おかしく風刺する内容に終始するようになる。もともと戯作者であった魯文にとって、庶民向けの小新聞が本来の活躍場所であったというべきだろう。

前島や魯文同様に文芸方面に造詣のある投書者としては、ほかに東杵庵と岡丈紀がいる。東杵庵は俳諧師であり、大新聞への投書は1件のみだが、その投書では俳句会の情報提供を求めている⁽⁷⁷⁾。以降の小新聞への投書でも、俳句に関するものが数件ある⁽⁷⁸⁾。それ以外では、学問を勧めるもの⁽⁷⁹⁾、徳について説諭するもの⁽⁸⁰⁾、あるいは「なん」の語義について論じたもの⁽⁸¹⁾など、文明開化を説く教導職という立場にふさわしく、ほぼすべてが庶民向けの内容である。岡丈紀は戯作者であり、大新聞に掲載された投書は、芸能関連の投書が4件中3件を占めている。小新聞への投書は多くはないが、新聞を読み聞かせてもらう感心な按摩の話や⁽⁸²⁾、仮名垣魯文への祝詞⁽⁸³⁾などである。

残りの5名はいずれも経歴が異なる。江馬活堂は岐阜大垣の医師で、大新聞には保守的な立場から、欧州式の婚礼を批判したり⁽⁸⁴⁾、廃刀に反対の立場を表明した投書⁽⁸⁵⁾などが掲載されている。しかし小新聞への投書は、体に悪い食物の話や⁽⁸⁶⁾、売薬関連⁽⁸⁷⁾、乳児の病気について⁽⁸⁸⁾など医師らしい専門的な投書から、神主の生活苦⁽⁸⁹⁾、古事記の内容に関する疑問⁽⁹⁰⁾まで多岐にわたるが、金の外国への流出に触れた投書⁽⁹¹⁾以外は、政治関連の投書はみられない。

左官の柳沢貞吉は、同職の者へ学問を勧めたり⁽⁹²⁾、人の鑑となるような車夫の話⁽⁹³⁾を大新聞へ投書しているが、小新聞への投書も旧弊批判⁽⁹⁴⁾など、庶民向けの内容にほぼ終始している。後

藤昌直はハンセン氏病の治療に尽力した後藤昌文の子であり、自身もその後父の道を進むことになる⁽⁹⁵⁾。その一方で俳句もたしなみ、小新聞投書者とも親交を結んだらしいが⁽⁹⁶⁾、大新聞への投書は運河の狭さの解決法を提案したり⁽⁹⁷⁾、看板の横文字のわかりづらさに苦情をいう⁽⁹⁸⁾など、社会関連の内容である。小新聞への投書は郵便受けの設置をすすめたり⁽⁹⁹⁾、車夫への忠告⁽¹⁰⁰⁾や品行を論ずる⁽¹⁰¹⁾など、いずれも文明開化を前提とした内容となっている。

文心堂は柴田量平が経営する群馬高崎の書肆で、大新聞への投書6件のうち4件は、頼母子講を旧弊として批判したほぼ同文の投書である⁽¹⁰²⁾。残りの2件は上記についての論争が1件⁽¹⁰³⁾、もう1件は桑の栽培法について書かれた本の紹介である⁽¹⁰⁴⁾。小新聞への投書は、勉強と立身出世についてのもの⁽¹⁰⁵⁾以外は、『読売』の売捌き所となったこともあり、『読売』への祝詞である。成川六左衛門の経歴は不明だが、自身の投書によると千葉の農民であるらしい⁽¹⁰⁶⁾。大新聞の投書はいずれも社会批判であり、世情を嘆じたり⁽¹⁰⁷⁾、裁判所の混雑の解決法を提案⁽¹⁰⁸⁾したりしている。小新聞への投書も湯屋の煙突の煙をどうにかしてほしいという内容である⁽¹⁰⁹⁾。

その他、投書掲載数が4件以下の投書者についても、ほぼ同様の傾向がみられる。ただし大新聞に掲載された投書の一部には、政治関連の議論がある。たとえば1874年の台湾出兵に際して、国民が儉約して戦費を出せと論ずる投書⁽¹¹⁰⁾や、民撰議院論が盛り上がらないことに疑問を表明した投書⁽¹¹¹⁾などである。だが全体としては、風俗の乱れを戒めたり⁽¹¹²⁾、炎暑で身体を壊さないよう忠告する⁽¹¹³⁾など、社会関連の話題が多い。そして小新聞への投書は、学校教科書の記述の誤りを指摘したものや⁽¹¹⁴⁾、賢い芸者の話⁽¹¹⁵⁾、郵便料金についての質問⁽¹¹⁶⁾、知人への祝詞⁽¹¹⁷⁾など、ほぼすべてが社会的ないしは文芸的内容で占められている。

このように、政論紙化以前の大新聞に掲載された投書の大半は、文芸的あるいは社会的関心を示していた。そしてこれらの投書者は、大新聞が政論紙化しはじめた時期以降、それまで投書していた大新聞ではなく、小新聞へと投書先を変えていったのである。このことは、大新聞の投書に政治的議論が増加するのにもなって、政治的なことならに関心をもたず、一方で社会的な関心を維持した投書者が、みずからと問題意識を共有する小新聞へと、投書先を変更していったことを示しているのではないか。いいかえれば、政論紙化以前の大新聞と小新聞とが、文明開化の啓蒙という内容面において連続していたことが、投書者における連続性を生み出したと考えられるのである。むしろこの点については、政論紙化以前の大新聞投書者全体の動向に位置づけ、より広い視点から検討することも重要だが、すくなくともここで取り上げた投書者に関しては、以上のような捉え方が妥当であると思われる。

5. 結論と課題

ここまで検討してきたように、政論紙化以前・以後の大新聞と小新聞の双方に投書が掲載された投書者に関して、いくつかの点が明らかとなった。

第一に、従来から指摘されていた大新聞と小新聞の読者層の断絶は、投書者についてもほぼ同様に当てはまる。それは、たんに大新聞と小新聞にまたがって投書が掲載された者がきわめて少ないというだけでなく、大小両紙に投書が掲載された者の投書内容が、新聞の性格に応じて書き分けられていたという点も含んでいる。

第二に、大小両紙に投書が掲載された投書者の大半は、小新聞では『読売』に投書していた。このことは、『読売』の投書者が他の小新聞二紙にくらべて、階層が上位にある者をより多く含んでいたことを示唆する。読者層に関して、小新聞のうち『読売』がもっとも幅広いという指摘を考慮すると、『読売』は、投書者においても同様に幅広い階層を獲得していたといえるのではないか。

第三に、政論紙化以前の大新聞から小新聞へと投書掲載先が変わった投書者は、少数ながら確認された。これらの投書者の投書内容は、文明開化を前提とした社会的・文芸的内容が主であり、大新聞の政論紙化および文明開化的性格の脱落に伴い、新たに文明開化を標榜する新聞として登場した小新聞へと投書者が移行したと考えられる。すなわち政論紙化以前の大新聞と小新聞の投書者における連続性が、わずかながらも存在したことを、これらの投書者は示しているのである。

以上の点のうち、第三点目からは、この時期の新聞読者層についての新たな仮説を提起することができだろう。すでに述べたように、政論紙化以後の大新聞と小新聞の読者層の違いについては再三論じられてきたが、政論紙化以前の大新聞の読者層についてはほぼ不明であった。しかし投書者の階層は、読者の階層そのものを示すわけではないが、読者層を探る有力な手がかりである。そして本稿で明らかにしたように、小新聞の投書者であった人物のなかに、小新聞創刊以前、すなわち政論紙化以前の大新聞に投書していた者が存在した。つまりこのことは、政論紙化以前の大新聞から小新聞へ購読紙を移行した者が存在した可能性、すなわち読者層における連続性を、わずかではあるが示唆しているのである。

ただしこうした点を明らかにしていくためには、投書者に関してさらなる調査が必要である。本稿では、大小両紙へ投書した者の動向に関心があったため、政論紙化以前の大新聞投書者のうち、小新聞への投書がない者が政論紙化以後の大新聞へ継続して投書を行なったかどうかについては詳らかにしえなかった。また、政論紙化以後の大新聞および小新聞へまったく投書しなかった者についても、今回の調査では対象に含まれなかった。これらの点については、今後の調査によって明らかにしていきたい。

さらに、各紙の投書欄のみを調査・分析対象としたことも本稿の限界を示している。すなわちいくつかの大新聞には、政論紙化以後に設けられた「雑録」欄（『朝野』）など、主として文芸関連の投書を掲載する欄があった。そのため、社会的あるいは文芸的関心をもつ投書者が、小新聞ではなく大新聞に投書する動機も残されていたのである⁽¹¹⁸⁾。ただし「雑録」欄などには、投書者からの投書と、編集者の執筆による記事とが混在し、かつ署名が記載されないことも多いため、いずれが投書であるのか判別できないケースが多々ある。そのため、これらの調査には困難が予想されるが、今後さらなる調査を続けることで、投書者の実像に可能なかぎり迫っていきたいと考えている。

表1 大小両紙に投書が掲載された投書者の投書掲載数の内訳および略歴

	主な筆名	本名または通称	投書掲載数										生没年	投書時前後の職業ほか	
			大新聞						小新聞						
			東日	報知	朝野	曙	横毎	真事	読売	絵入	仮名	合計			
*	1	前島和橋、風柳閑人	前島柳之助	0	2	0	0	0	0	48	77	39	166	1837-1906	画工、絵草子屋
	2	西村賢八郎、通新舎	西村賢八郎	0	1	0	0	0	0	53	0	21	75	1845頃-?	元彰義隊十八番隊長
	3	琴通舎康楽	杉山孝次郎	0	0	0	0	1	0	33	8	31	73	1831-1886	狂歌師
	4	浣花翁	岡本長之	1	53	0	0	0	0	10	0	0	64	1816頃-1881	開拓権少書記官
*	5	神奈垣魯文、赤神三馬	仮名垣魯文	0	2	2	3	3	3	4	25	2	44	1829-1894	『仮名読』編集長
	6	わかな、倭仮名小僧	若菜貞爾	0	0	2	0	0	0	3	3	35	43	1854-1918	官吏※、著述業※
	7	転々堂主人、足薪翁	高島藍泉	0	0	1	0	0	1	36	0	2	40	1838-1885	戯作者
	8	晴雪居士、尚生	渡辺尚	2	0	13	0	0	0	3	7	13	38	1856-1912	川崎造船所
	9	星野康斎	星野康斎	2	9	7	0	0	0	13	0	0	31	-	医師
	10	中村一能、鍛の屋一農	中村一能	0	0	0	1	0	0	20	1	6	28	1842-1927	警視庁、狂歌師、地主
	11	島村泰	島村泰	3	7	6	1	0	4	5	0	0	26	-	大蔵省官吏
	12	岸田吟香、銀二	岸田銀次	0	3	0	0	0	0	12	5	2	22	1833-1905	業商
	13	角利助、高志摩鳥羽	角利助	1	14	0	0	0	0	0	4	0	19	1853-1928	『伊勢新聞』創刊、のち衆議院議員
	14	上田英吉	-	0	0	0	0	0	18	1	0	0	19	-	-
	15	石場飄斎、飄斎古麗	石場有恒	0	0	1	0	0	0	9	9	0	19	-	俳人
*	16	江馬活堂、藤渠主人	江馬元益	3	2	0	0	0	2	10	0	0	17	1806-1891	元藩医、本草学者
	17	学農社	-	4	1	4	3	2	0	2	1	0	17	-	津田仙や社中による投書
	18	成島柳北	成島惟弘	0	7	9	0	0	0	1	0	0	17	1837-1884	漢詩人
	19	竹内猛虎	-	0	0	0	12	0	0	0	4	0	16	-	-
	20	山脇巍	山脇巍	4	0	0	7	0	0	4	0	0	15	1856※-?	-
*	21	柳吉、左官鏡丸	柳沢貞吉	0	2	0	0	0	0	13	0	0	15	-	左官
*	22	後藤直、後藤昌直	後藤昌直	1	0	0	0	0	2	0	11	1	15	1857-1908	後藤昌文の子、医師
	23	高山秀平	-	1	0	0	0	13	0	1	0	0	15	-	-
*	24	東杵庵、東杵庵月彦	穂積勝重	0	1	0	0	0	0	12	1	0	14	1825-1892	俳諧教導職(権少講義)
	25	桑田衡平	桑田衡平	1	12	0	0	0	0	1	0	0	14	1836-1905	元藩医、軍医、内務省、赤坂区会議員
	26	新宮誠二	松山誠二	4	3	1	2	0	0	1	1	0	12	-	東京大学予備門教諭
	27	紫芳、飄乎山人	加藤飄乎	0	0	0	0	2	0	9	0	0	11	1856-1923	『読売』記者、翻訳家
	28	放誕子	加藤九郎	3	4	0	0	0	0	2	0	1	10	1830-1890	『読売』記者、開拓使御用掛
	29	春野梅吉	-	0	0	0	0	1	0	9	0	0	10	-	-
*	30	文心堂	柴田量平※	1	2	0	0	1	2	3	0	0	9	-	書肆、読売新聞売捌所
	31	久保田貫一	久保田貫一	6	0	2	0	0	0	1	0	0	9	1850-1942	のち外務官僚、埼玉県知事等
	32	猪瀬弥一	-	0	0	1	0	0	0	8	0	0	9	-	版本職(投書より)
*	33	岡丈紀	河原英吉	0	1	0	0	3	0	0	0	4	8	?-1890	工部省鉄道寮技手、著述業
	34	脇山義保	脇山義保	3	0	2	0	0	2	1	0	0	8	-	岩手県議会議員
	35	番丁一	-	0	0	6	0	1	0	0	0	1	8	-	-
	36	雨窓孟三	-	0	0	4	0	0	0	2	2	0	8	-	-
	37	宮島陸一郎	宮島陸一郎	0	0	0	7	0	0	1	0	0	8	-	順天求合社中(投書より)
	38	蘭満川照漁	-	0	0	1	0	0	0	5	0	0	6	-	-
*	39	成川六左衛門	-	0	5	0	0	0	0	1	0	0	6	-	農民(投書より)
	40	勝田貞	-	1	0	0	0	0	0	4	1	0	6	-	-
*	41	金井潭	金井潭	0	0	0	0	0	3	0	0	1	4	1840-1908	『横毎』記者、養蚕家、『信飛新聞』編集長
*	42	石川正身	石川正身	1	2	0	0	0	0	0	0	1	4	-	駅通寮少属
*	43	狂言堂如舉	瀬川如舉(三世)	0	3	0	0	0	0	0	1	0	4	1806-1881	歌舞伎作者
*	44	内山泰親	-	0	0	0	2	0	1	1	0	0	4	-	-
*	45	仮名垣熊太郎	-	0	0	0	0	0	1	3	0	0	4	-	仮名垣魯文の長男

46	三角湘江	-	0	0	1	1	0	0	0	2	0	4	-	-
47	会議所	-	1	0	1	0	1	0	1	0	0	4	-	-
48	鈴木篤太郎	-	0	0	0	2	0	0	2	0	0	4	-	-
49	古川正雄、古川氏	古川正雄	1	0	0	0	0	0	3	0	0	4	1837-1877	築地海軍兵学寮教官
50	水野清	-	0	0	1	0	2	0	1	0	0	4	-	-
51	浅井昌平	-	0	3	0	0	0	0	1	0	0	4	-	-
52	大畑弘国	大畑弘国	0	0	3	0	0	0	1	0	0	4	1844-1913	国学者、男山八幡宮少宮司
53	辻平兵衛	辻平兵衛	0	0	3	0	0	0	1	0	0	4	-	油商※
54	田中正賢	田中正賢	3	0	0	0	0	0	1	0	0	4	-	羊肉商
55	肥塚龍	肥塚龍	0	1	1	0	0	0	0	0	2	4	1851-1920	のち衆議院議員
56	末田瀧	-	1	0	2	0	0	0	1	0	0	4	-	-
* 57	友昇	森田太四郎	0	0	0	0	2	0	0	0	2	4	1834-?	鯉節商、俳人、教導試補
58	沢田総平	-	0	0	0	0	0	2	0	1	0	3	-	-
59	朝田甚吉	-	0	1	1	0	0	0	0	0	1	3	-	-
60	心配堂主人	-	0	1	0	0	0	0	1	1	0	3	-	-
61	きん	-	0	1	0	0	0	0	1	0	1	3	-	芸者 (投書より)
62	恩庄	-	1	0	0	0	0	0	2	0	0	3	-	農民 (投書より)
63	山越茶梅	-	0	0	1	0	0	0	1	1	0	3	-	-
64	四竈訥	四竈訥治	1	0	0	0	0	0	2	0	0	3	1859-1928	のち音楽教育者、音楽雑誌発行
65	小沢善平	小沢善平	0	0	0	0	2	0	1	0	0	3	1840-1904	果樹園経営・果樹販売
66	蘭竹草堂	-	1	0	0	0	0	1	1	0	0	3	-	医師
* 67	丸尾某	-	0	2	0	0	0	0	0	1	0	3	-	-
68	藤井綏明	藤井綏明	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	-	医師
* 69	岡野松蔭	-	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	-	-
70	加藤鼎三	-	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2	-	-
71	河手勝味	-	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2	-	-
* 72	渋谷孝国	-	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	-	-
73	東野春耕	-	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	-	-
* 74	久保田彦作	久保田彦作	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	1846-1898	『仮名読』編集長、歌舞伎作者、地主
75	管熊作	-	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	-	-
76	近藤芳樹	近藤晋一郎	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	1801-1880	国学者、歌人、宮内省
77	菰田生	-	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	-	-
78	高浜貞治	-	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2	-	-
79	高粱千影	-	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	-	-
80	佐藤昭徳	-	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2	-	同人社 (投書より)
* 81	四角齋	-	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2	-	-
* 82	小池半海	-	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	-	-
83	小田原屋の主人	-	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	-	前栽問屋 (投書より)
84	神谷彦太郎	-	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	-	-
85	石黒忠恵	平野恒太郎	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2	1845-1941	軍医、のち軍医総監・貴族院議員・子爵
86	田上末内	-	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	-	陸軍下士 (投書より)
87	鯛出五狼	-	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	-	-
88	米田稔	-	0	1	0	0	0	0	0	1	0	2	-	-
89	穂苺生	-	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2	-	-
90	末広軒	-	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	-	-
91	名倉忠翁	-	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2	-	-
92	郵便汽船三菱会社	-	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2	-	-
新聞ごとの投書者数			28	31	35	13	14	18	74	23	22			

(注1) 欄外の「*」は第4章で検討する投書者を示す。

(注2) 表中の「※」は推定を示す。

(注3) 「投書時前後の職業ほか」欄では、1870年代から1880年代にかけて携った職業を掲げている。

(注4) 経歴の調査にあたっては、土屋礼子 (2002) 『大衆紙の源流』世界思想社、120-121ページの表のほか、各種人名辞典等を参照した。

		73	74	75	76	77	78	79	合計
石川正身	大	東日	1						1
		報知	2						2
		朝野							0
		曙							0
		横每							0
	真事誌							0	
	小計	3	0	0	0	0	0	0	3
	読売								0
	絵入								0
	仮名読					1			1
小計	0	0	0	0	0	1	0	1	
総計	3	0	0	0	0	1	0	4	
狂言堂如草	大	東日							0
		報知	3						3
		朝野							0
		曙							0
		横每							0
	真事誌							0	
	小計	3	0	0	0	0	0	0	3
	読売								0
	絵入				1				1
	仮名読								0
小計	0	0	0	1	0	0	0	1	
総計	3	0	0	1	0	0	0	4	
内山泰親	大	東日							0
		報知							0
		朝野							0
		曙		2					2
		横每							0
	真事誌		1					1	
	小計	3	0	0	0	0	0	0	3
	読売				1				1
	絵入								0
	仮名読								0
小計	0	1	0	0	0	0	0	1	
総計	3	1	0	0	0	0	0	4	
仮名垣熊太郎	大	東日							0
		報知							0
		朝野							0
		曙							0
		横每							0
	真事誌		1					1	
	小計	1	0	0	0	0	0	0	1
	読売		1	2					3
	絵入								0
	仮名読								0
小計	1	2	0	0	0	0	0	3	
総計	2	2	0	0	0	0	0	4	
友昇	大	東日							0
		報知							0
		朝野							0
		曙							0
		横每		1	1				2
	真事誌							0	
	小計	1	1	0	0	0	0	0	2
	読売								0
	絵入								0
	仮名読					1	1		2
小計	0	0	0	0	1	1	0	2	
総計	1	1	0	0	1	1	0	4	
丸尾某	大	東日							0
		報知	1	1					2
		朝野							0
		曙							0
		横每							0
	真事誌							0	
	小計	1	1	0	0	0	0	0	2
	読売								0
	絵入				1				1
	仮名読								0
小計	0	0	0	1	0	0	0	1	
総計	1	1	0	1	0	0	0	3	

		73	74	75	76	77	78	79	合計
岡野松蔭	大	東日							0
		報知							0
		朝野							0
		曙							0
		横每		1					1
	真事誌							0	
	小計	1	0	0	0	0	0	0	1
	読売								0
	絵入								0
	仮名読				1				1
小計	0	0	1	0	0	0	0	1	
総計	1	0	1	0	0	0	0	2	
渋谷孝国	大	東日							0
		報知							0
		朝野							0
		曙							0
		横每							0
	真事誌		1					1	
	小計	1	0	0	0	0	0	0	1
	読売			1					1
	絵入								0
	仮名読								0
小計	0	1	0	0	0	0	0	1	
総計	1	1	0	0	0	0	0	2	
久保田彦作	大	東日							0
		報知							0
		朝野							0
		曙							0
		横每							0
	真事誌		1					1	
	小計	1	0	0	0	0	0	0	1
	読売								0
	絵入								0
	仮名読						1		1
小計	0	0	0	0	0	1	0	1	
総計	1	0	0	0	0	1	0	2	
四角斎	大	東日		1					1
		報知							0
		朝野							0
		曙							0
		横每							0
	真事誌							0	
	小計	1	0	0	0	0	0	0	1
	読売		1						1
	絵入								0
	仮名読								0
小計	1	0	0	0	0	0	0	1	
総計	2	0	0	0	0	0	0	2	
小池半海	大	東日							0
		報知							0
		朝野							0
		曙							0
		横每							0
	真事誌		1					1	
	小計	1	0	0	0	0	0	0	1
	読売								0
	絵入								0
	仮名読			1					1
小計	0	1	0	0	0	0	0	1	
総計	1	1	0	0	0	0	0	2	

注

- (1) 小野秀雄 (1922)『日本新聞発達史』大阪毎日新聞社、104-107 ページ、佐々木隆 (1999)『日本の近代 14 メディアと権力』中央公論新社、76 ページなど。
- (2) 政論紙化がいつ始まり、いつ完了したか、その時期を明確に示すことはきわめて難しい。具体的な目安としては、『公文通誌』が『朝野新聞』に改題して成島柳北が入社した 1874 年 9 月や、『東京日日新聞』に福地源一郎が入社して社説が掲げられはじめた 1874 年 12 月などいくつかあるが、それによってただちに投書者の投書内容が変化したわけではない。そこで本稿では便宜的に、1874 年以前を政論紙化以前、1875 年以降を政論紙化以後としている。
- (3) 政論紙化以前の新聞は「大新聞」とは呼ばれなかったが、本稿では便宜上政論紙化以前・以後を問わず大新聞と呼ぶこととする。
- (4) 内川芳美 (1959)「明治初期の新聞と読者」『言語生活』99、24-25 ページ。
- (5) 以下、紙名は次のように略記する。『東京日日新聞』→『東日』、『郵便報知新聞』→『報知』、『朝野新聞』→『朝野』、『横浜毎日新聞』→『横毎』、『東京曙新聞』→『曙』、『日新真事誌』→『真事誌』、『読売新聞』→『読売』、『東京絵入新聞』→『絵入』、『仮名読新聞』→『仮名読』。なお各紙の創刊年月は、大新聞は『横毎』1870 年 12 月 (1879 年 10 月『東京横浜毎日新聞』に改題)、『新聞雑誌』1871 年 5 月 (1875 年 1 月『あけぼの』→1875 年 6 月『曙』に改題)、『東日』1872 年 2 月、『真事誌』1872 年 3 月、『報知』1872 年 6 月、『公文通誌』1872 年 11 月 (1874 年 9 月『朝野』に改題)、小新聞は『読売』1874 年 11 月、『絵入』1875 年 4 月 (1875 年 4 月『平仮名絵入新聞』→同年 9 月『東京平仮名絵入新聞』→翌年 3 月『絵入』に改題)、『仮名読』1875 年 11 月 (1877 年 3 月『かなよみ』に改題) である。各紙の調査には以下の資料を利用した。『東日』:『東京日日新聞』(復刻版) (1993-1995) 日本図書センター、マイクロフィルム (国会図書館所蔵)。『報知』:『郵便報知新聞』(復刻版) 郵便報知新聞刊行会編 (1989-1993) 柏書房。『朝野』:『朝野新聞』(復刻版) 東京大学法学部近代日本法政史料センター編 (1981-1984) ぺりかん社、『日本初期新聞全集』北根豊・鈴木雄雅監修 (1986-2000) ぺりかん社、原紙 (一橋大学図書館所蔵)。『曙』:『東京曙新聞』(復刻版) (2004-2008) 柏書房。『横毎』:『東京横浜毎日新聞』(復刻版) 毎日新聞社編 (1990-1992) 不二出版。『真事誌』:『日新真事誌』(複製版) (1992-1999) ぺりかん社。『読売』:データベース (読売新聞メディア企画局データベース部 (1999)『明治の読売新聞』)。『絵入』:原紙 (昭和女子大学近代文庫所蔵)、マイクロフィルム (国会図書館所蔵)。『仮名読』:『かなよみ』(復刻版) 山本武利監修 (1992) 明石書店。
- (6) 実際の投書欄の名称はさまざまであり、「寄書」「諸方寄書」「投書論説」などの名称が用いられた。
- (7) なお投書者数は、実際にはこれより少ないと推定される。初期に多くみられる無署名の投書については、1 件につき投書者 1 名としてカウントしたが、これらのなかには同一の投書者による投書も含まれている可能性があり、また署名がある場合でも 1 人の投書者が複数の筆名を用いているケースも想定されるためである。
- (8) 小新聞投書者に関しても、同様の指摘がなされている (土屋礼子 (2002)『大衆紙の源流』世界思想社、117 ページ)。
- (9) 1882 (明治 15) 年に『東洋新報』と改題したのち、同年末事実上廃刊となっている。
- (10) 小新聞の一号当たり発行部数は、たとえば 1877 年では『読売』約 18,000 部、『絵入』約 6,000 部、『仮名読』約 5,500 部である (土屋礼子 (2002) 前掲書、273 ページ)。
- (11) 山本武利 (1981)『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、72 ページ。
- (12) 大久保忠宗 (1990)「二人の幕臣のために - 新資料・星野康斎宛福澤書翰 -」『福澤手帖』67、3 ページ。
- (13) 『読売』1875 年 9 月 23 日。
- (14) 以下では投書の内容をおおまかに政治的か社会的かで区別しているが、ここでいう政治的とは、外交問題や民権運動、士族の処遇など国家の政策に直結することがらを主に指し、社会的とは、人びとの風俗や生活、職業に関わるものを指す。

- (15) 『朝野』 1875年10月10日、10月22日。
- (16) 『報知』 1875年11月6日、12月16日、1876年1月6日、『朝野』 1875年11月8日。
- (17) 『報知』 1877年4月6日、『朝野』 1878年6月11日。
- (18) 『朝野』 1875年9月30日。
- (19) 『報知』 1876年8月24日、『東日』 1876年8月26日。なおこれら2件の投書はほぼ同文である。
- (20) 『読売』 1875年11月30日、12月25日。
- (21) 『読売』 1876年1月20日。
- (22) 『読売』 1876年2月24日。
- (23) 『読売』 1877年10月27日、12月11日。
- (24) 『読売』 1876年1月5日。
- (25) 『絵入』 1876年3月24日。
- (26) 『絵入』 1876年3月28日。
- (27) 『報知』 1875年12月29日。
- (28) 『報知』 1876年9月8日。
- (29) 『報知』 1879年8月9日、『東日』 1879年8月15日。
- (30) 『報知』 1873年10月10日。
- (31) 『報知』 1874年1月8日。
- (32) 『報知』 1875年1月26日。
- (33) 『報知』 1873年10月26日。
- (34) 『報知』 1876年4月10日。
- (35) 『報知』 1876年6月22日。
- (36) 『読売』 1875年8月29日。
- (37) 『読売』 1877年4月4日。
- (38) 『読売』 1875年9月10日。
- (39) 『報知』 1874年2月20日。
- (40) 『朝野』 1874年4月13日、『真事誌』 1874年4月14日、『東日』 1876年2月22日。
- (41) 『報知』 1874年6月18日、1875年9月10日、『朝野』 1875年4月2日。
- (42) 『読売』 1875年9月23日～10月13日。なお鳥村泰の1876年の投書11件のうち、10件はさきに触れた媒助法についての論争である。
- (43) 『読売』 1875年7月4日。
- (44) 『読売』 1875年8月29日。
- (45) 『東日』 1875年9月2日、9月22日。
- (46) 『曙』 1875年10月12日、『東日』 1875年10月16日。
- (47) 『曙』 1875年11月13日、12月6日。
- (48) 『朝野』 1877年5月25日。
- (49) 『朝野』 1877年10月4日。
- (50) 『朝野』 1877年11月13日。
- (51) 『報知』 1876年3月12日。
- (52) 山崎有信(1904)『彰義隊戦史』隆文館、238ページ。
- (53) 『読売』 1876年10月3日。
- (54) 『読売』 1877年3月5日。
- (55) 『読売』 1878年3月31日。
- (56) 『報知』 1875年9月22日、『読売』 1875年9月19日(小田原屋の主人)。

- (57) 『朝野』 1876年3月30日、『読売』 1876年3月31日（郵便汽船三菱会社）。
- (58) 『東日』 1877年2月2日、『読売』 1877年2月24日（河手勝味）。
- (59) 『朝野』 1875年4月5日、『読売』 1875年4月10日（菰田生）。
- (60) 『朝野』 1877年5月8日、『読売』 1877年6月16日（高梁千影）。
- (61) 『報知』 1876年11月13日、『読売』 1876年11月14日（穂苅生）。
- (62) 『朝野』 1876年8月27日、『読売』 1876年8月31日（末広軒）。
- (63) 『朝野』 1876年4月2日、『読売』 1875年2月3日（藤井綏明）。
- (64) 『曙』 1878年9月21日、『読売』 1878年2月13日（加藤鼎三）。
- (65) 『朝野』 1876年6月23日、『読売』 1875年7月14日（神谷彦太郎）。
- (66) 『東日』 1875年6月27日、『読売』 1876年3月12日（田上末内）。
- (67) たとえば高浜貞治は、大新聞に裁判所の混雑緩和法（『東日』 1875年7月19日）、小新聞には華族批判（『読売』 1875年7月10日）をそれぞれ投書している。
- (68) 政治的といっても圧制批判などではなく、国産の増加による富国強兵を説く（佐藤昭徳『読売』 1875年9月22日）といった程度の内容である。
- (69) むろんこうした「書き分け」が、新聞社側の投書選別の結果でもある点は留意する必要がある。とくに小新聞は、極端な政治的内容の投書掲載を避けた可能性が高い。ただし最終的に掲載された投書は投書者自身が書いたものであり、そうした選別を前提として、投書者は投書内容を書き分けて投書していたと考えべきであろう（なおこの時期の投書が書き換えられていた問題については、拙著（2012）『近代日本のメディアと階層認識』吉川弘文館の補章を参照）。
- (70) 内訳は、投書数の多い順に、澁花翁、島村泰、成島柳北、高島藍泉、辻平兵衛、小澤善平である（ただし会議所修路掛は組織であるため数から除外している）。
- (71) ただし21名のうち4名は1875年に大新聞への投書がある。また江馬活堂は1879年にも大新聞への投書が1件あるが、時期が離れているため21名の側に含めた。
- (72) 『報知』 1874年12月8日。
- (73) 『報知』 1874年12月18日。
- (74) 土屋礼子（1991）『『仮名読新聞』投書欄の詩歌と作者たち』『一橋論叢』 105(2)、264ページ。
- (75) 『真事誌』 1873年6月18日。
- (76) 『真事誌』 1873年7月7日。
- (77) 『報知』 1874年8月16日。
- (78) 『絵入』 1875年9月15日、『読売』 1875年11月18日。
- (79) 『読売』 1875年12月20日。
- (80) 『読売』 1876年4月1日。
- (81) 『読売』 1876年6月22日。
- (82) 『仮名読』 1876年5月25日。
- (83) 『仮名読』 1876年8月18日。
- (84) 『報知』 1874年4月14日。
- (85) 『東日』 1874年11月2日。
- (86) 『読売』 1875年10月19日。
- (87) 『読売』 1876年9月4日。
- (88) 『読売』 1876年10月18日。
- (89) 『読売』 1875年7月14日。
- (90) 『読売』 1875年8月3日。
- (91) 『読売』 1876年3月23日。

- (92) 『報知』 1874 年 9 月 26 日。
- (93) 『報知』 1874 年 10 月 8 日。
- (94) 『読売』 1875 年 6 月 3 日、1878 年 4 月 27 日。
- (95) 山口順子 (2005) 「後藤昌文・昌直父子と起廃病院の事績について」『ハンセン病市民学会年報』 2005、115-132 ページ。
- (96) 野崎左文 (2007) 『私が見た明治文壇 1』 平凡社、65 ページ。
- (97) 『真事誌』 1873 年 12 月 12 日。
- (98) 『東日』 1874 年 4 月 4 日、『真事誌』 1874 年 4 月 5 日。
- (99) 『絵入』 1876 年 3 月 27 日。
- (100) 『絵入』 1876 年 4 月 6 日。
- (101) 『絵入』 1876 年 6 月 6 日。
- (102) 『報知』 1874 年 1 月 16 日、『東日』 1874 年 2 月 3 日、『真事誌』 1874 年 2 月 12 日、『横毎』 1874 年 2 月 23 日。
- (103) 『真事誌』 1874 年 4 月 9 日。
- (104) 『報知』 1874 年 4 月 14 日。
- (105) 『読売』 1878 年 4 月 5 日。
- (106) 『報知』 1875 年 1 月 12 日。
- (107) 『報知』 1873 年 8 月 6 日。
- (108) 『報知』 1875 年 1 月 12 日。
- (109) 『読売』 1876 年 5 月 8 日。
- (110) 『曙』 1874 年 9 月 20 日 (内山泰親)。
- (111) 『東日』 1874 年 5 月 22 日 (渋谷孝国)。
- (112) 『報知』 1873 年 12 月 8 日 (石川正身)。
- (113) 『報知』 1873 年 8 月 2 日 (瀬川如臯)。
- (114) 『読売』 1875 年 4 月 14 日 (内山泰親)。
- (115) 『読売』 1875 年 7 月 5 日 (仮名垣熊太郎)。
- (116) 『読売』 1875 年 6 月 10 日 (渋谷孝国)。
- (117) 『仮名読』 1876 年 8 月 22 日 (金井潭)。
- (118) 山本武利 (1981) 前掲書、68 ページ。